

他性と多性

——他者の哲学／哲学の他者としての宗教哲学——

佐藤 啓介

世俗化や宗教概念の形成、キリスト教の相対化、さらには哲学の脱教会化などが進む西欧近代において、宗教哲学は誕生した。そのため、それ以降の宗教哲学は、一、哲学的理性による宗教批判という「宗教からの遠心運動」、二、哲学的理性を超えるものとしての宗教を論じるという「哲学からの遠心運動」という二重の運動を内に抱えることになった。その二重性は、十九世紀以降の「西欧近代批判」という文脈において、西欧近代を構成するキリスト教的諸価値を哲学の立場から批判しつつ、西欧近代を構成する理性を宗教の立場から批判するというかたちで、より先鋭化されていった。また、この後者の運動は、宗教を哲学的理性の外部として定位していくが、同時にそれは、一部の宗教哲学を、「宗教について」哲学するのみならず、「宗教的に」哲学する営みとしても規定していった。つまり、概念と比喻とを同時に駆使しつつ、哲学において思惟されていないもの、されえないものを思惟する、という営みである。

その宗教哲学が、目的格・形容詞それぞれの意味での「宗教」の内実をめぐって、近年の宗教本質論批判のもとで再考を迫られているのは確かである。だが、宗教哲学の問い直しに

は、宗教哲学自体に由来する背景がある。そうした問い直しは、二重の運動の前者「近代批判としての宗教批判」がラディカルに展開した帰結でもある。デリダの世界ラテン化論やヴァッティモの「神の死以後の非宗教的なキリスト教」論に代表されるように、現代の宗教哲学は、宗教近代・西欧批判を内部に組み込んでいる。

その一例が、現代フランス語圏において「宗教哲学らしきもの」として展開されている一群の思想である。ここにおいては、「現れない他者としての他者」が哲学に鉛直的に導入され、神と呼ばれていたような超越者や、私たちの隣人であるような他人とが、倫理的視点から論じられている。これらの思想が宗教哲学らしきものとして受容されている、ないしされうるのは、他者を持ち出すその方法のドグマ的独断性に理由があるだけではない。確かにその方法面において、「哲学的理性を超えるもの」としての他者を扱う「哲学からの遠心運動」が見られる。だが同時に、そうした思想の背景には「他者を全体化してきた西欧近代とそのキリスト教的政治・神学体制」への批判があり、「哲学による宗教批判」という「宗教からの遠心運動」も内在しており、二重の運動性を保持している。

このような他者とは、何も超越者や隣人には限定されない。他的事であることと超越的事であることは同義ではない。しかし、だからといって、「他者の哲学」一般の内部に「宗教的な他者」専用の固有領域を探るのは、問題を見誤っている。そうした探求は、まさに宗教固有の本質を探するという行為、すなわち、近代的・西欧的な宗教概念を世界ラテン化の中で拡大再生

パネル

産する行為にほかならず、それへの批判として他者の宗教(的)哲学が立ち上がったはずだからである。そのため、他者の宗教(的)哲学は、「哲学にとつての他者」という指標のもと、宗教と呼ばれる領域の内外に多様にまたがる類似事象を包摂させた異種混交的なもの、として理解すべきである。

しかし、現代の他者の宗教(的)哲学における他者には偏りがある。動植物、亡霊、死者、さらには事物まで、定義上、他者概念は拡張されうるはずである。むしろ、超越と呼ばれていた垂直運動、そしてその多様な類似経験を「上の方」ではなく「他の方」へ向かつて、その多様性を維持しつつ再記述していくことが求められている。思惟の内部に多なる他性／他なる多性を切り開くこうした試みは、近代に生まれ二重運動の中で形成されてきた宗教哲学の、現代における一つの産物なのである。

パネルの主旨とまとめ

堀 雅彦

近年、「宗教」概念の歴史的形成過程についての研究が充実を見せるにつれ、宗教に固有の「本質」なるものを想定することは、もはや現実的にも理念的にも妥当性を持たないのではないか、との疑念が広く共有されるに至っている。このような状況において、少なくとも従来は宗教の本質を説明することを自

らの存在意義としてきた宗教哲学は、現在どのような思考の営みとして存在するのか。本パネルでは、この問いを、一方では宗教哲学の過去を現在の視点から振り返りつつ、また、他方ではその現在に予感されている未来の可能性を展望するという、二つの方向において考察した。

まず、堀は本質論を「強い意味での本質」論と「弱い意味での本質」論とに分け、現在、前者の説得力は著しく低下しているものの、後者を完全に離れることは困難であり、むしろそれを離れないことの自覚に立ち、錯綜する複数の類似性のいずれかに「投票する」ことの実践的意味を積極的に捉えなおすことが必要だ、との見解を提示した。

小柳氏は、オットーに対するトレルチの批判に注目し、両者の「本質」理解が歴史性への配慮の濃淡という点で差異を有することを明らかにした。特に、「本質規定は本質形成である」というトレルチの言葉に示されるとおり、彼の本質論が決して没歴史的な議論ではなく、むしろ固有の歴史状況への応答という側面への峻厳な自覚に立つものであったことに、改めて注目すべきであると氏は述べた。

松野氏は、神経科学の知見を宗教哲学に導入する一つの可能性を提示した。特に、近年大きな話題になっている、「意思に先行して脳が活動している」というリベットの報告が自由意志や靈魂の問題にどのような帰結をもたらすかを考察した上で、その帰結の唯物論的傾きが必ずしも宗教の否定に直結しないことを明らかにした。

佐藤氏は、宗教哲学が成立期から抱え込んだ二重の遠心運動